



第143回例会 1962.4.10 (火)

斎藤求画伯

例会場 鶴岡市一日市町 ひ さ ご や (707番)
 事務所 鶴岡市馬場町十日町口 商工会議所内 (1563番)

次回例会

4月17日 (火)

卓話 カステス師父帰朝談

○出席報告

本日の出席	出席数 40名	届出	佐藤(貞)君、早坂君、鷺田君、菅原君、石井君、岡崎君
出席率	83.33%	無届	佐藤(寅)、板垣君
前回の修正出席	前出席率 79.17%	メ	大野君
修正出席数	40名	ク	村山R.C
修正出席率	83.33%	ア	長谷川君
		ッ	酒田R.C
		ブ	

○司会 三浦会長

○ソング 奉仕の理想 リーダー 広瀬君

○ビジター 高野豊一君 } 酒田R.C
 荒井清君 }

○連絡事項 三浦会長

○昨年9月より共ロータリー精神に精進して参りました村田君米沢に御栄転なさることになり来期は出席委員長として御活躍を期待して居つた矢先で誠に遺憾ですが御本人の御栄転でありますので本日饞別の宴を催して益々御盛運をお祝いいたします。



- 村田君より挨拶あつて後会長より記念品を贈呈す。
- 4月4日谷口社会奉仕委員長と同道市役所を訪ね「護美籠」を鶴岡公園に配置して頂く様贈つた。
- 松木君に病氣見舞として金一封を差上げる様手配を依頼した。
- 青森のアツセンブリーに会長、幹事、三井、武田4君出席した。
- 会長三井君より会の状況報告あつた。
- 1. 今年度のインター、フォーラムは鶴岡でやることには変りないが組合せが變つて山形県と福島県の二県が組合せとなつた。
- 2. 今年度地区大会は仙台で開催の予定。
- 3. ワンダーフォーゲルは今迄北部三県丈けで行つておつたそのパンフレットをもらつた、今後は南部三県もこれに協力して欲しいと強く要望された。
- 4. 来年度1日講習会は塩釜の予定の由であつた。
- 来る14日午後7時より美園グリルでアツセンブリーを開きます。
- 月末メークアップ早く当該クラブに連絡する事。
- 幹事は各委員会の活動にタッチせず各委員会の自主的活動を図ること。
- 公式訪問時委員長都合悪い場合次席者が報告して幹事代行せぬこと。
- 一つの委員会だけに重点置かず四つの委員会活動を平等にゆかせること。

○幹事報告

○会報到着 八戸、弘前東、山形西、天童、石巻、横浜西、石巻東、大曲、五所川原、本荘

○例会日時等変更

京都東R.C 4月13日~4月10日 (火)

PM12.36より

○新クラブ誕生

東京江東R.C-毎水MP 12.30~

於江東橋三丁目 きんし町

大垣西R.C一毎火MP 12.30~

於大垣市駅前 ミッチャム

江別R.C一毎土MP 12.30~

於パラデリーミルク

○チャーターナイト御案内

北見東R.C 6月9日(土) 於北見会館

登録13.20~ ¥2,500

花輪R.C 5月26日(土) 於花輪高校体育館

登録11.00 ¥2,500

小名浜R.C } 6月3日(日) 於警城市市民会館
勿来R.C } 登録11.00~ ¥2,500

その他塩釜、仙台南、仙台、各R.Cより新年度役員及理事の御通知をいたゞいています。又仙台南R.Cのビジター登録料¥400になつた由の通知も来ます。三沢R.C一年史の冊子贈呈ありました。

○国際奉仕委員会 小花君

○エネスコ、ギフトクーポンに協力して欲しいと日本エネスコ国内委員会より二冊送つて来た。

昨年酒田よりの分は韓国の養護団体に配分された当クラブも賛同して3,800円送ることとする。

○社会奉仕委員会 谷口君

○加茂の秋野君から寄贈あつたので桜苗木50本昨年に引続き鶴一中に、他50本を購入し鶴四小に贈つてはどうか一同賛成あつた。

○三井君より

北大の名誉教授三井君の医院に13日夜来宅されるから北ドイツの事情を聞く会を開くからと勧誘あつた

○鈴木君より

郡市計画に伴う道路変更で宅地を二分されることになつて居つた鈴木君此の機会に新牛乳処理工場建設中のところ見事に竣工して4月1日より販売致しますと披露あつた。

○卓話 1. 明治維新と清河八郎 } 成沢米三君
2. 清川八郎の生涯 }

1 明治維新と清河八郎

明治維新は、大化の改新と共にわが日本の国史中にあつて、最も輝かしい改革の一つである。日本はこの明治維新によつて、内は封建の陋習を破り、外は外国の圧迫を抑えて明治の御代を展開し、近代国家として発足する起点をなしたのである。

この歴史的な大事業に参画した勤皇憂国の志士は百数十人を数えるが、その多くは水戸、京都、長州、土佐、薩摩等、関西、九州で東北では清河八郎只一人である。而して清河八郎の生地清川村は、徳川家の親藩であり、戊辰の役に於いては、会津藩と共に最後まで薩長の官軍と戦ひ抜いた荘内藩の治下であつたから、こうした立場にあつて尊皇討幕という回天の大業に当る清河八郎の苦心は、大久保利通、久坂玄瑞等のように、藩主と共に活躍

した志士とは月日の談でない。

幕末勤皇を唱えたものは多く、藤田東湖然り高山彦九郎然り蒲生君平、株子平等何れも優れた憂国の志士であつたが、個人として遊説しただけで、対幕の画策まではやつていない。橋本景伍、佐久間象山の如きも英傑として天下の知る所であるが、短臂徒牛の運動で嘗て天下の志士を会したことはない。これらの人々は英傑たるに相違ないが、堂々と軍備を集めて幕府に対抗を計つたのは実に清河八郎がその魁であつた。清河八郎は明治維新の論功行賞では第一に挙げられるべき人物である。昭和八年五月、清河八郎を祭神とする清河神社が創建された時近世日本国民史の著者徳富蘇峯翁は「維新回天偉業之魁」という大額面を贈られたが、清河八郎は正しく、明治維新の魁をなした人である。

2 清河八郎の生涯

弘化4年、清河八郎十八才の5月2日の真夜中に、書を枕頭に遺して家を出て、立谷沢村から添川に行き松根大網を経て残雪尚残る六十里越のけわしい道を通り寒河江、山形を過ぎて江戸に出た。それは江戸に出て天下第一流の学者について学問を修めるためであつた。清河八郎の少年時代の日記「旦起私乗」によると、十五才の正月の記事に、「人生豈碌々として市塵に亡びんや、時至れば即ち笈を東都に負い大名を天下に轟かさん」と書いている。清河八郎は幼名を斎藤元司といい、天保元年十月十日、清川村斎藤治兵衛の長男として生れた。母は鶴岡の三井弥吉の三女亀代である。そんな関係からか十才の時から三年ばかり鶴岡にあつて書を清水群治に学を伊達鴨蔵に学んだのである。十四才清川に帰つて関所の役人畑田安右工門に五経を学んだが、八郎はこれに満足出来ず、江戸に出て天下一流の学者について勉強しようと考へたのである。それで再三父にその希望を述べたが、父の許を得ることが出来なかつたので終いに書を遺して出発したのである。父雪山は俳人として有名であり且つ教養の高い人であつたので、清河八郎の好学の精神の固いことに心を思い直して江戸遊学を許して

雲井まで登ばらば帰れあげ雲雀
という句を餞に贈つている。(次回に続稿す)

○ニコニコ箱

金井(勝)君	病気で休んで
黒崎君	病氣小康出勤出来て
鈴木君	牛乳新処理場竣工して
飯白君	誕生祝い
佐藤(伊)君	病氣よくなられて
張君	日本外科学会のためアツセンブリ欠席

○本日の献立

刺身平目、焼物鱒、紅葉おろし
お汁、孟宗、生物、味噌粕